

ヘカタイオスの地理的世界

緒言

豊田 和 一

前六世紀の東地中海世界の歴史的趨勢によって、アッシリア帝国滅亡後の再編成の荒波がついに直接ギリシア人に波及し、とりわけ小アジアのギリシア人は東方の大国リュディア、次いでペルシアによってその目を外界に開かせられた。彼らはギリシア人とバルバロイを意識すると同時に、自らの国の風俗文化と他国との違い、そして何よりもその地理的民族的相異を自覚せざるをえなかったのである。それまでに彼らは、地中海・黒海への第二次植民運動を完了し、西方の地理的知識を習得していた。加えて、ペルシア帝国の版図がついにインドに達するに及んで、当時の西方歴史世界が初めて一体となった。換言すれば稀薄ながらも地中海世界が誕生したのであり、この世界全体の地理的知識を総合・整理・体系化し、学問的な地理学を創始する気運が高まったのである。時を同じくして、イオニアの地で沸き上がったのが、自己の思考や判断力を伝統の場に置き代えたあのイオニア自然哲学の思潮であり、この学問的母胎から「地理学の父」ミレトス人ヘカタイオスは生まれたのである。

彼がその歴史篇の冒頭で力強く宣言したあの言葉、「私にとって真実であると思われることを以下記すのである。というのも、ギリシア人の物語は多いが、私には笑止千万だと思われるので」(断¹¹)こそ、その成果は軽視されているとはいえ、この思潮を体現している。結果はともあれ、イオニア精神を意識し、その態度で世界と

取り組もうとした意気込みをもった最初の人々の一人として評価されるべきである。まさしく、ミレトスで記憶されるべき人々は、タレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネス、ヘカタイオスなのである(証³)。叙事諸の韻文に対して散文を用いた、ヘカタイオスをはじめとするロゴポイオスらは、徹底した日常生活の言葉で表現した。ディオゲネス(二・3)は、「アナクシメネスはイオニア方言を、簡潔かつ通俗的に用いたのである」と伝えている。この人物の仲間の一人としてヘカタイオスは活動したのであり、その師アナクシマン드로スが作製した世界地図を改良したのも彼であった。

ヘカタイオスの著作は歴史篇と地理篇から成り、後者はベリオドス・ゲス『世界周遊記』またはベリエゲシス『地誌』の名称で引用されている。この地理篇は今日断篇でしか現存せず、数においてステパノス⁽²⁾によって蒐集された『民族誌』と称される地理辞典による地名・部族名が多数を占めているが、簡略なもので原著の内容を知ることには困難である。しかし断篇から推測するならば、この地理篇は二巻より成り、第一巻はヨーロッパ、第二巻はリビアを含めたアジアから構成されていた。その特色は、記述の順序が地中海の西端ヘラクレスの柱から始まり、地中海の北岸を東進してアジアに至り、そこからエジプト、リビア沿岸を進むという具合に地中海を一巡するものであった。ここではヤコービ(F. Jacoby)の断篇集を底本として、その簡略な註解を試みたものである。⁽³⁾

一 ヨーロッパ

I 西部ヨーロッパ・イタリア・シンリ島・イオニア海沿岸スペインを中心とした西部ヨーロッパ地方に関連した断篇は非常

ルタル海峡) 近辺の町、エリビュルゲ、カラテ(断38・39)が最も西ということになる。当時ケルト人はまだアルプス山脈を越えず、恐らくその北・西辺を占めたという見解が通説である。ヘロドトス(二・33・四・49)の叙述では、ケルト人はヘラクレスの柱以西に住み、そこにはピュレネという町があり、そこからイストロス(ダニューブ)河が発しているとしている。上記ケルト人の分布は、ヘカタイオスがその住民をナルバイオイ人と称す交易地にしてケルト人の町ナルボン(断54)とケルト人の町に向かい合っているリギュエス人の町にしてポカイア人の植民市マッサリア(断55)で、ケルト人領域の南と東を意味する。タルテッソスの滅亡とポカイア船

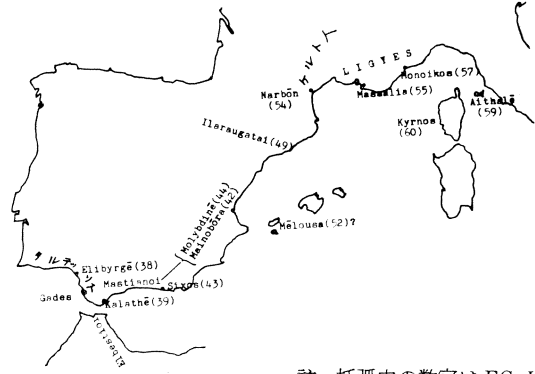


図1 西部ヨーロッパ

註、括弧内の数字はFG rHの断篇番号を示す。

に少ない。全体として、ステパノスによるスペインとリビエラの都市と部族の名称に言及した断篇から構成される。だが、古来名高いタルテッソスやガデスやスペインの大西洋岸の問題となる都市そのものに関係する断篇が皆無なものには失望させられる。更に、西地中海を制覇することになるカルタゴ人の言及もないのは驚きである。タルテッソスやヘラクレスの柱(ジブラ

ル)に対するジブラルタル海峡閉鎖によって、ギリシア人は現在のナルボンヌからポルドーの陸上路によってのみ、地理に接触できた。こうした前六世紀後葉の状況は、ケルト人の町ナルボンとその領土に隣接したギュエス人の町マッサリアの記述に一致する。また海峡閉鎖の確実な年代は、(1)前五三七―五年、アラリアのポカイア人を中心とした西方ギリシア諸都市連合艦隊が、カルタゴ・エトルリア連合軍にコルシカ島のアラリア沖で実質的敗北、(2)前五〇九年、カルタゴとローマの最初の条約で海峡航行禁止を決定、(3)ここによって確定される。(4)ここで示されたヘカタイオスの叙述の特徴は、ある町の政治勢力と同様にそこの原住民の名称に関連して町を記述するものであった。この手法は更に、北イタリアのリグニア海沿岸の都市でも発揮される。例えば、エリシユコイ族(断53)はリギュエス人の一部族で、モノイコス(モノコー断57)は彼らの町であり、アムペロス(断58)も恐らく同様なマッサリアの植民市であろう。

イタリアの記述では、北・中部イタリアについてほとんど記録しなかったのは、この地域がエトルリア人に占領さ



図2 イタリアとシシリー島

れてギリシア人の進出を阻んだからであろう。その反面、南イタリ
アは地域に分割し、イタリアの名称をブルッティウムの南方部分に
限定し、その北部をオイノトロイ人の国と称し、北東ではこの国は
ペウカイオイ人（断88）やペウケティアンテス族（断89）と境を接
し、北西ではアウソネス人と境を接していた。ヘカタイオスは勢力
を握った新興のギリシア人やテュルセノイ（エトルリア）人の名称
よりも古い名称を用い、多くの内陸の町々を列挙しているのはシュ
パリスの勢力拡大とテュレニア海への陸上交易路の発展の証拠で、⁽⁵⁾
この地方の記述はこの町の滅亡前五一一〇年頃のものであろう。

シシリー島に関連した断篇は、⁽⁶⁾単にシケリアの町と伝えるだけ
でその建設者の名すら挙げていない。この点は、フェニキヤ人、カ
ルキス人、その他の植民者に全然ふれていないことと考え合わせて、
西部ヨーロッパ叙述の方法と一致している。この地方の状況を決定
するのに重要な年代としては、リリュバイオン（断75）はまだ単な
る岬であって町ではないし、ザンクレ（断72）はレギオンのアナク
シラスによって前四九三年以降のある時期にメッサナと再命名され
たが、ヘカタイオスは古い名称を知っていた。彼は前四七六年の僭
主ヒエロンによるカタネ（断73）からアイトナへの名称変更も、前
四〇九年のヒメラ（断78）の破壊も知らなかったのである。

ヘロドトス（一・163）が、ポカイア人はアドリエスを発見して世
に知らしめたと述べている時、現在我々が理解するアドリア海や彼
の時代のイオニア海（湾）ではなく、むしろその北部かアドリアま
たはアドリアの町の近辺を指し、ここからアドリア海の名称が広ま
っていったと推理される。実際アドリアの町に関する断90では、こ

の町から同名の湾と川の名が由来しているという。しかし確実なこ
とは、たとえギリシア人の内ポカイア人が初めてこの地域に進出し
たとしても、後代に至るまでこの地域の詳細は不明であり、イスト
ロス河の一河口があると信じられていたほどである。

真偽は不明だが、ヘカタイオスは他と比較してむしろ詳しいと思
われるほど、イオニア海近隣の諸部族（断91―96）を列挙している。
初めてイッリュリオイ人の町と記されているのは、オイダンティ
ン（断98）である。ヘカタイオスはかなり詳しくエペイロス地方を
知っていたようで、ステパノスによればピンドス山脈のラクモン山
からイナコス川とアイアス川が流れ出ている（断102a）とされ、ス
トラボンは彼が後者をアオオス川と呼ぶとし、同一の奥地から両河
川が発し、前者は南方のアルゴスへ、後者は西方のアドリア湾へ流
れるとしている（断102b）。更に彼が、前者はアムピロキアのアル
ゴスを通してアケロイオス川に注ぎ、後者は西のアポロニアへ
流れ込むと述べたと報告している（断102c）。

II ギリシア本土・エーゲ海の島々 ギリシア本土に関連する
諸断篇は、もっと西方に言及する諸断篇と次の二点において異なる。
（1）ステパノスは町の地理的位置を海との関係ではなく、むしろ
別の町や山やその地方のある別の地理的特徴に関連して決定してい
る。例えば、ボキスはパルナッソス山周辺の地（断114）、オリュク
ライはナウバクトス近くの町（断112）、コリントスはペロポネソ
スの地峡内の町（断120）である。（2）都市の起源やその建設者へ
の言及は、他よりもはるかに頻繁である。例えば、ポイオティアの
町コロネイアはコロノスに由来（断117）、アッティカ島ヘレネは

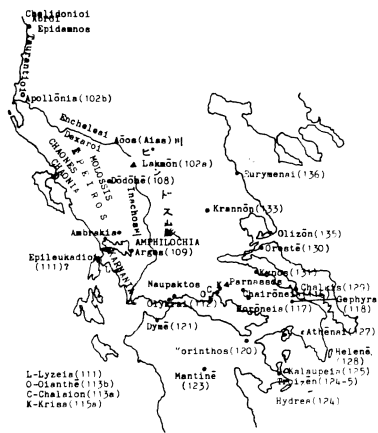


図3 エペイロスとギリシア本土

海の島々で記録されているものは、トラキアまたは小アジアの海岸近くに限られ、アジア沿岸と結びつけられての説

「イリオン征服後にヘレネが上陸したと語られている」(断128)、ボキスの町クリサはボキスの息子クリソスに由来(断115a)、ボキスはあるボコスという人物に由来(断114)、カイロネイアはカイロンに由来(断116)、等(断115b・129・133)である。そしてもう一つの特色は、ヘカタイオスに帰せられる綴り字の異形を記していることである。例えば、アカルナニアの町リリュゼイア(断111)はアリュゼイア、ナウバクトス近くの町オリュクライ(断112)はモリュクライ、デュメ(断121)はエペイイスまたはアカイイス、アガムメイアはマンティネイマンティネイア(断123)と同じであり、また古い名称としてレウカス(?)の代わりにエピレウカディオイ(断110)の町、タナグラにゲピュラ(断118)、コリントスにエピュラ(断120)カルキスにエウポイア(断129)の記録がある。

ギリシア本土はかなりよく描かれているにも拘らず、クレタ島やキュクラデス群島に関連した断篇が皆無なのは驚きである。エーゲ

明がその特色である。例えば、ステパノスはキオス島の位置を「エリュトライに面し」、コルセアイ島を「サモス島の真向かいのイオニアの島」としている(断141・143)。しかし、これら二島を含めてレムノス、レスボス、オイヌッサイの諸島(断138a・140・142)はヨーロッパの巻で取り扱われているので、これらがヘカタイオスの時代、即ち前六世紀後半のギリシア世界でのヨーロッパとアジアの境界を形成していると推定される。ヘカタイオスの典拠であるかは疑問だが、本土と同様にステパノスは町や島の語源、または伝承を引用している。例えば、レムノス島とその町ミユリナ(断138a・c)テネドス島、レスボス島のミュティレネの町、キオス島(断139-141)である。

III マケドニア・トラキア・スキュティア 明らかにマケドニアに関連する断篇はわずかに二篇で、「南にパオロス山とボコス山」とロイディアス川が記録されている(断144・145)。この川はスキュラクス(66)でもマケドニアの川であり、ヘロドトス(七・127)ではリュディエス川と称されて、ハリアクモン川と合流してマケドニア、ボッティアイア両地方の境界を成すとされている。ただ、アクシオス河口のカラストレとテルメがトラキアの町とされている(断146)ので、逆推理してその南にごくわずかながらマケドニアの海岸線、恐らくペネイオス川からハリアクモン川間のある地域を認めていたことになる。

三七の断篇がトラキアまたはトラキア人の土地に言及し、その内二一は沿岸または海岸近くの町々や部族を記載している。確実な証拠には欠けているが、ヤコービはヘカタイオスが扱った地理記述を

ル (brytos) と、黍とブリーカリア (という植物) から製造した酒 (parabie) を飲み、「乳から造ったオリブ油のようなものを体に塗りつける」と伝えている。ヘロドトス (七・124) はクセルクセスの遠征部隊がアカントスからテルメに向かう途中で彼らの国を横切ったと述べ、断篇ではカルキディケのシトニア半島のガレブノス (断 152) が「トラキアのバイオネス人の町」とされ、彼の言い分と一致する。ギリシア人のこの地域への植民は、バイオネス人や他の原住民の内陸への移動を引き起こし、残留したとしてもその民族性を喪失させたのである。

カルキディケ半島またはアクシオスとストリュモン両河川間の海

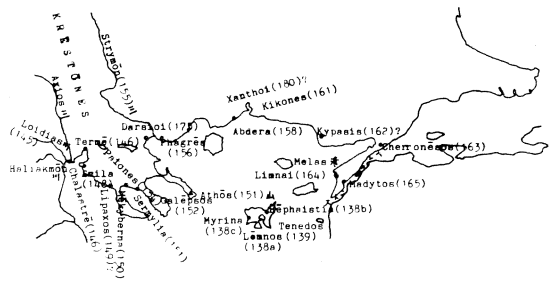


図4 マケドニアとトラキア

再構成して、ハイモン山をトラキアの北の境界としたと論じているが、(7) 必ずしも総論的なものではない。概して、ヘカタイオスが後代の地理学者より広い地域を被うために、トラキアの用語を使用したことはありうる。風習に関係したのはバイオネス人 (断 154) だけであり、アテナイオスはヘカタイオスを典拠として「大麦から醸造したビール

再構成して、ハイモン山をトラキアの北の境界としたと論じているが、(7) 必ずしも総論的なものではない。概して、ヘカタイオスが後代の地理学者より広い地域を被うために、トラキアの用語を使用したことはありうる。風習に関係したのはバイオネス人 (断 154) だけであり、アテナイオスはヘカタイオスを典拠として「大麦から醸造したビール

岸沿いの町々については、ヘロドトスがクセルクセスの進軍に合わせて詳しく報じている。彼が、遠征軍の関係しない町々まで叙述していることは、ある地理書、恐らくヘカタイオスのものを十分活用したことを示唆する。(8) 次はストリュモン川とトラキアのケルソス間の断篇である。ヘカタイオスがホメロスの地理に依存していることは、ゾネとマロネイア (断 161・159) をキコネス族の町、「トラキア『半島』に面したキコニアの町」としている点から判明している。この部族はホメロスからよく知られているが、歴史時代の初期には消滅していたと思われる。ところで、ヘレスポントスの用語について、ヘカタイオスに曖昧な点がある。テネドス島とキユバシスの町 (断 139・162) は、それぞれヘレスポントス内、またはその近辺と規定されているのでその範囲が問題である。後者の場合考えられる解決法は、メロス湾をその中に含ませることである。トラキアのケルソネスにあるリムナイ、マジュトスの二つの町 (断 164・165) はそれぞれヘレスポントス内の、またはその町とされ、前者は西海岸にあるとみられるので、この推測を裏付けよう。

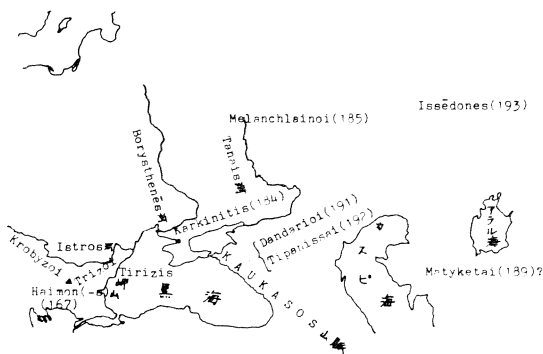


図5 トラキアとスキュティア

ケッロネノスについての断篇は歴史的に重要である。それは、ミルティアデイス（一世または二世）がまだその僭主であった時代にヘカタイオスが記録したからである。ヘロドトスは肝心の町の名に言及していないが、断篇は「ケッロネノスの町が半島の地峡部に」（断163）と指摘しているので、この町こそ僭主の町である。クセルクセスの遠征軍は、パクテュエとカルディエ間にある地峡部のアゴレの町を通過したとヘロドトス（七・58）は伝えているし、この町がひき続き存続したことは、アテナイの貢割り当て表によって証明されている。それ故、この町がケッロネノスであり、僭主政崩壊後にその名称を変更し、政治的重要性を喪失した蓋然性はあろう。⁹⁹

内陸の部族や町々に言及した数篇があるが、ヘカタイオスがトラキアの北限をどこに設定したかは決定しがたいのである。また、カリアクラ岬の古代名ティリジス岬は、ある時トリゾイ族（断171）が黒海沿岸まで進出したことを示唆するのかもしれない。興味ある一断篇は、「次にベルシア人の町ポリュザ、そしてテュニアス（岬）」（断166）とされ、この町はステバノスだけが黒海地方の町と称している。重要なのはベルシア人の町としている点で、同様な表現がインドの記述（断299）にも見い出され、ヘロドトス（七・59）によれば、ドリスコス平野にベルシア王の城塞があり、ダレイオスのスキュティア遠征以来のものとしてされている。そこで、この町は大王の遠征によって建設されたとの解釈が成立する。この推測が正しければ、この地域の叙述年代が判明すること、大王がギリシアの植民市に対抗してこの地域に都市を建設しようとした点が判明する。

以上わずかな資料から得られる結論は、（1）ヘカタイオスは、

後世マケドニアであると考えられたずっと広大な領域をも含めてトラキアの用語を使用した。（2）後世忘れ去られた他の土地へ移住した数部族を少くとも知っていた、（3）ギリシア人の植民者がこの地方にどのくらい影響力を及ぼしていたかに関心がなかった、の三点である。

スキュティアとその東北部に言及した断篇はわずか十であって、その内一篇だけにステバノスは単なる部族や町の名以上の説明を与えている。それはメランクライノイ（黒い外套を着た人々）族に関係したもので、「ヒツペモルゴイ族が馬の乳を搾ることのために、またモツシュノイコイ族がその住居のために呼称されているように、彼らの衣服からこの称されている」（断185）というものである。しかし、ステバノスはこの情報をヘロドトス（四・107）から得ることができたので、この風俗記事がヘカタイオスから由来する証左は何もない。この記事を含めて、彼の記録を再現するには、ヘロドトス四巻の「スキュティア譚」の解釈抜きには語れない。

ヘロドトスは一般に先輩達、とりわけヘカタイオスを無視しようとする傾向がある。例えば、断185は黒衣族がスキュティア人だとしているが、彼（四・20）は非スキュティア系の別の民族と主張、また断193はイッセドネス族をスキュティアの部族としているが、彼（一・201）はマッサゲタイ人がイッセドネス人と対峙してアラクセス河の向こうに住むとし、この民族をスキュティア人と同人種だとする人もいると補筆しているので、暗にヘカタイオスを指すのかもしれない。そこでヘカタイオスは北方の民族を一般にスキュティア人と称したと思われる。カルキニティスの町（断184）はクリミア半島の頸部に位置するが、

カルキネの別の形で後代の作家にみえ、⁽¹⁰⁾それがギリシア人の町にも拘らず、ヘカタイオスはこれを彼の手法によってスキュティアの町と称した。そして、コーカサス山脈北方のヨーロッパ側のスキュティア人として、ダンダリオイ、ティパニツサイ族(断191・192)の名が挙げられているので、スキュティアの内陸部まで知識が及んでいたろう。アジアに住むイアマイ族(断215)は、アッシリアのアサルハドン王(前七世紀前半)の時代に侵入して、ウルミア湖の南に王国を形成した者達の子孫であろう。

一 アジア

ヨーロッパの記述はほぼ地中海沿岸に沿って記載すればよいが、アジアの叙述順序の問題は容易ではない。まず記述の出発点はトリアキアとキンメリアのボスポロスのいずれかなのか、それとももっと遙か東方なのか不明であるし、また地理的環境によって暗示される地中海のような自然の配列もない。ヘロドトスのアジアの概観(四・36以降)によれば、黒海のアジア沿岸、ヘレスポントス地域、小アジアの西と南の沿岸、シリア・アラビア地方、ベルシア湾と黒海を結んだ線とその東の内陸地方、そして、アジアの一部でもあるアフリカ北部の記述が、その海岸線に沿って東から西へと固定された配列で従う。更に、ベルシアの第一―四行政区、世界地図によるイオニアから帝都スサまでの民族名、ギリシア遠征軍への軍船供出国からもその大略を汲みとることができよう。

I 小アジア 黒海のアジア沿岸の記述が西から東の方向へ進んだことは、「ティバレノイ人の東でモツシュノイコイ人は境を接している。彼らの所にコイラデスの町が」、「コイ人の東でディゼ

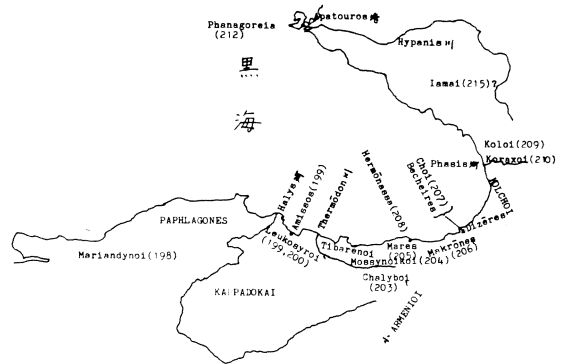


図6 黒海のアジア沿岸

東、再度そこから南西の方向へ進んだとするのが妥当である。断197は、彼が黒海の何らかの距離か沿岸旅行の期間を与えた証左と解釈され、ヘロドトスにはない弦で結ばれた弓のようなスキュティア地方の湾曲が指摘されている。西から東へ進んで最初に出会ったのがステバニスという町をもつマリアンデユノイ人(断198)、西のバブラゴネス人(断287)と東のカッパドキア人の境界ハリュス河(ヘロドトス、一・6・72)レウコシュロイ人の町力ディシア、テイリア(断200・201)、テルモドン河畔のカリュボイ(1ベス)人とスキュラクス(88、スタメネイア)が言及する彼らの町スタメネ(断202)があり、彼らは南で小アルメニア人と隣接(断204)、ヘロドトス(三・94・77)が彼らと共ス人は境を接している(204・207)の二つの引用から窺い知ることが出来る。だがまず海岸線については、「そこで、ボスポロスと黒海は以上のようにであり、ヘレスポントスもこれら(の数字)が私の測定したものである」(断196)の引用が信憑性のあるものとすれば、ヘロドトス(四・86)がヘカタイオスに倣ったのであり、我々もトリアキアのボスポロスから始まって最初に

にベルシアの第一九納税区を構成し、クセルクセス軍部隊として言及しているマレス、マクロネス人(断 205・206)、コイ人とディゼレス人(断 207)、ヘルモナッサの島とその町(断 208)、パニス河の北のコロイ人とコラクソス族(断 209・210)、ヒュパニス川が注ぐ湾でそれをヘカタイオスがアバトウロスと呼ぶ湾(断 211)に面したパナグレシアの町(断 212)である。

ヘレスポントスからキリキアまでの小アジア沿岸は、ヘカタイオスによって熟知されており、断篇の数(断 217—268)も多いが、彼が執筆した当時既に全土がベルシアの支配下にあった。またギリシア本土やエーゲ海諸島で用いたのと同様に、神話学的手法に立ち戻つた節を暗示するものが散見される。例えば、断 239 は

メロスのプテイロン山をヘカタイオスがミレトス後方のラトモス山と同一視したと論じ、更にハリゾネス人(断 217)がポリュステネス河を越えるほどのそんな北方からではなく、ブリュギアのアラジヤからやって来たと伝えている。これらからして、彼はホメロスの問題の町々を遠方の地に想定する代わりに、できる限り

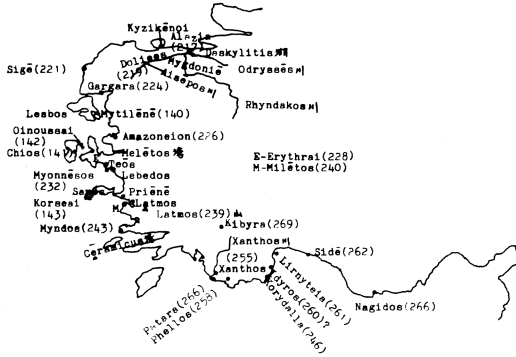


図 7 小アジアの西と南

近隣の地に借定したのであり、この合理化の傾向は、西方大洋上のエリュテティア島の代わりにアムブラキアからヘラクレスが雄牛達を追ってきた解釈(断 26)でも確認できる。町の名称の語源や建設者の伝承に関しては、例によって、ステパノスがどこまで彼を引用しているかが問題である。例えば、エリュトライはクノボスに因んでクノブポリスと称されていた(断 228)のであり、パタラはアポロンとクサントスの娘リュキアから生まれたパタロスに因んで名付けられた(断 256)のである。だが一断篇では彼の実際の言葉、「次に船の舵取りナギドスに由来するナギドスの町、そしてナギドウサ島」

(断 266) が引用されている。断篇に記載された町々のあるものは、見慣れない形や綴り字で表記されている。ヘカタイオスとストラボン(VII・一・5・58)がアイオリス人の町とし、古くはガルガロスと称されたトロイアの町ガルガラ(断 224)は「イデ山頂に」と伝えられている。シゲ(断 221)は、彼が記録した時まだアテナイ人がそこを占領していたかは伝えておらず、単にトロイアの町としている。シゲはシゲイオンの古称であったろうし、彼はギリシア本土でのように、古い名称や少くともかわった町の名に好意を示している。例えば、アマゾネス人が住んでいた故にキュメをアマゾネイオン、スミウルナ湾をメレス川に因んでメレトス湾と称している(断 226・227)。

純粹な地理学的観点から生じる問題は、ヘカタイオスがトロイア、カリヤ、リュキア、パムピュリア、キリキアの用語に与える地方の境界である。明らかに、これらの地方の境界によって彼の記述は分割されていた。何故なら、シゲ、ラムボネイア、ガルガラをトロイ

アの町、キュメとスミルナ湾を「アイオリス人の章で」述べたと引用されているからである(断 221・223・224・226・227)。そして、ミレトスの記述は「カリヤにある名高きイオニア人の町」(断 240)と正確であるが、一般にその分類は正式な境界線とは程遠い。またキュプロスの断篇は欠如しているし、内陸地方の境界を暗示するものもない。

II ペルシア・東のアジア・インド 次はペルシア帝国内の他のアジア行政区であるが、この部分の叙述の多くが保存されたならば、古代東方の地理や歴史の解明にどれくらい役立ったかと惜しまれる。第九納税区を構成するアッシリア・バビロニアに言及した断篇は、曖昧な断 285 を除いて皆無なので、この地域はまず除外されなければならぬ。⁽¹³⁾ アラビアもしくは紅海のアジア沿岸を記述したと推測させる唯一の記事は、「カマレノイ、アラビア人の島々」(断 271)である。ヘロドトスのアジアの概観によれば、説明も不用で当然の如くペルシア人が中心となって、「ペルシア人はエリュトレ(赤い)海と称されている南の海に達するまで居住している」(四・37)と表現されている。これ以外の他の記述もすべて、ペルシア人中心の観点に由来している。

ペルシアの海のキュレ島⁽¹⁴⁾(断 281)は、ヘロドトス(三・93)が大王による「強制移住民」が住むとするペルシア湾内の島嶼と関連すると思われる。さて、カルデユトス、カニユティスは共に「シリヤ人の大きな町」(断 279・280)とされる。後者は紛れもなくエジプトとの国境の町ガサであり、他にステパノスではカリユティス、ヘロドトス(二・159・三・5)ではカデュティス「シリヤ人の大きな

町」、「私の信じるにはサルデイスとほぼ同じ大きな町」と表現されている。ここで注目すべきは、ヘカタイオス同様ヘロドトスはその地を「大きな町」と称し、前者の故郷ミレトスとの関係を提示している。それは、エジプトのネコス王がこの町の遠征の際に着用していた衣裳を、ミレトスのブランキダイのアポロン神殿に奉納したというのである(二・159)。フェニキア同様ベルシケ(ペルシア)の領域も漠然としている。ペルシスに限定されないのは確実である。

パリカネ(断 282)はペルシアの町とされているが、ヘロドトスの行政区表でパリカノイと称される二民族は、一つはメディアア領内、他はアジアのエチオピア人と共に第一七納税区を構成する(三・92・

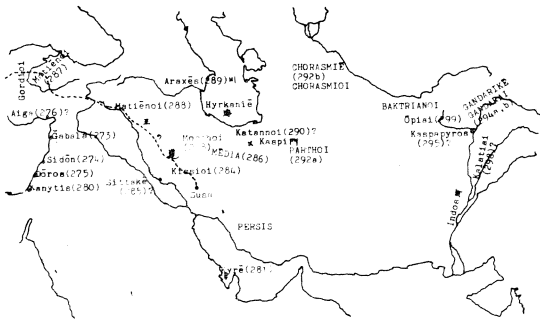


図 8 ペルシア帝国

94)。同じくペルシアの町とされるカンダナケ(断 283)は知られていないし、またシッタケ(断 285)は、ティグリス河畔の町とする人や、ブシッタケやペルシスにあるブシッタケネの地とする論者もある。

風俗については、衣服の記事が残されている。「キッシオイ人は、ペルシア人のキュパツシスの服をまとう」(断 284)と

され、また不明のゴルディオイ人に境を接するマティエノイ人の町ヒュオベの住民も、「バブラゴネス人とちようど同じような服をまとっている」(断 287)とされている。しかしながら、後者は小アジアの内陸地方に属すべき断篇である。⁽¹⁵⁾そして地理的には、ベルシスの東は断 289 とキュレ島(断 281)より推察される第一四納税区が続き東のアジアとなる。とくに前者は「ミューコイ人からアラクセス河まで」という内容なので、これが南北に走る境界線をなすという見解もある。続いて、第一六納税区はバルトイ(バルティア)、コラスミオイ人らによって形成される。これらの地域に含まれる、今までとは異なった類の地理記述が四篇ある。メディアは「カスピ門に沿ってある」地(断 286)、カスピ海周辺の土地については、「ヒュルカニエ海と称されている一帯の樹木の繁茂した高い山々、それらの山々に刺のあるキュナラがある」、⁽¹⁶⁾そしてまた「バルティア人の東にはコラスミオイ人が住む土地があり、彼らの所には平地や山地がある。その山地には野性の樹木、刺のあるキュナラ、ポブラ、ギョリュウが生える」(断 291・292 a・b)と伝えられている。

インドの記録は、ヘカタイオスとその説明をアジアに包括させたという以外は、それほど知識を与えてくれるものではない。だがしかし、キュロス二世の即位(前五五九年)後急激に勃興したペルシア帝国の版図にインドが併合され、この帝国の西端の住人ヘカタイオスが世界の東の涯インドの知識を有していたことこそ、むしろ驚嘆に価するであろう。ヘロドトスによれば、第一二納税区のバクトリアノイ人、次は第七納税区のカンダラー人、最後はインド人の第二〇納税区として配列できる(三・92・91・94)。ヘカタイオス

と彼の名称が一致するのは、カンダリケ(カンダラー)の町カスバピュロス(断 295―三・102・四・44、カスバテュロス)とカンダライまたはガンドロイ人(断 294 a・b―三・91・七・66、ガンダロイ)である。これら以外に、インドのカラティアイ族(断 298)、インドの町アルガンテが記され、インダス河附近にはキュナラが生育すると報じられている(断 297・296)。これらの知識の情報源として、ヘカタイオスがカリュアンダのスキュラクスの旅行記を利用したと想像される。地理叙述の特色を推測できる貴重な一断篇では、「彼らの内でインダス河畔に住む人々がオビアイ族で、更に王の城塞がある。そこまではオビアイ族。そこからインド人までの間は無人の荒野である」(断 299)と伝えているので、インダス河畔までペルシア王の支配権が確立していた事実が諒承される。これ以上の東方については、何も断篇から窺い知ることにはできない。

Ⅲ エジプト エジプトに言及した断篇は、とりわけ数が多いという訳ではない。だが、明らかにヘロドトスがヘカタイオスのあるものを利用したという十分な証拠はある。⁽¹⁷⁾それは、ヘカタイオスがエジプトのテバイを訪問し、そのの神官達から受けた仕打ちをヘロドトスもそこで受けたと語っているのである(断 300―二・143)。ギリシア人著述家の「窃癖を記す断篇では、「それとも、私は諸君に、ヘロドトスがその二巻で、ミレトス人ヘカタイオスの『ペリエゲニス』から多くの事を少し変えて逐語的に写したと何故言わなければならぬのかね。不死鳥や河馬や鱈の狩猟についての事柄を」(断 324 a)とある。また更に、「ヘロドトスとヘカタイオスはロゴイオスであり、一方(もしくはヘカタイオスのいずれか)にエジ

プトの土地についての作品があるなら、エジプトを河の賜物と二人が異口同音に称しているのは、彼がその地でえている明らか証左によって、ヘロドトスに説明したのである」(断301)とも報じられている。

ヘカタイオスがテバイへ赴き、その国での体験を述べたと記されていることは貴重な報告である。そこで、彼がエジプトの慣習について述べている多くの記事は、彼本人の実見と調査の成果である。ヘロドトス(二・77)と同じく、彼はキュッラストイスと称されるエジプト人の特殊なすっぱい小麦粉パンについて述べ、更に彼らがアルトバゴイ(パン食)であり、大麦から酒を造る、「大麦を酒になるように挽く」(断322・323 a・b)と語っている。他方、ヘロドトスは先輩の訪問地へ行って、機会あるごとに訂正を試みている。下エジプトの「河の賜物」は認めざるをえなかったが、「前もって聞き知っていなくとも、賢明な人なら一見すれば明らか」(二・5)とわざわざ註釈を施している。浮遊するカムピス島(断305—二・156、カムミス)についで、彼は浮遊したり動くのをまったく見たこ

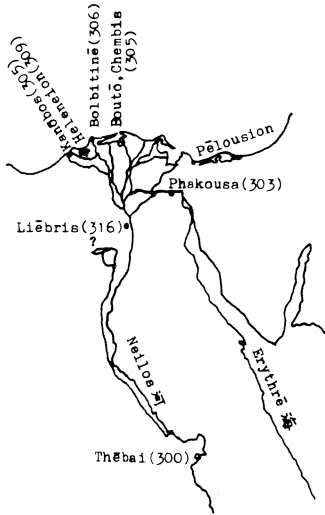


図9 エジプト

とがなく、本当に浮くのか聞いて驚いたとしている。ナイル河の水源についての三説はヘロドトス(二・20—23)の冷笑を引き起こしたが、彼は提唱者名をまったく挙げていないので、ヘカタイオスに関連するか不明である(断302 b)。また、ギリシア神話の登場人物に関連する地名起源説明がここでも使われている。それはメネラオスとヘレネの説明で、ヘロドトス(二・112—119)に調査の動機を与えることになった。ステパノスは、カノボス近くの地がヘレネイオン(断309)としているが、他方パロスとカノボスはメネラオスの船首と船尾の舵取りの名と指摘している(断307・308)。

諸断篇は何ら地理叙述の方法に示唆を与えてくれるものではない。ただ、短い引用ながら「アタラムピテ州とアタラムベの町」(断304)は、記述が「州」によって分類されていたことを暗示するので重要である。ボルビティネの町(断306)は、ボルビティノン河口がヘロドトス(二・17)に見える。ナイル河、紅海運河の出発点、バクゥツサイは、「エジプトとエリュトラ海との間の囲壁のない村」(断303)と記載されている。また、著名なギリシアの地名に因んで名付けられたナイル河中の島々、エベソス、キオス、レスボス、キュプロス、サモス、その他(断310)は、ギリシア人交易者が原地名を採用するよりも自分からの故国の名称を冠したことによる。

IV エチオピア・リビア エチオピア及びその南については、ピュグマイオイ(小人)族と鶴との戦闘が記述されている(断328 a・b)が、これはホメロス(イリアス、三・6—9)伝承の解釈である。ヘカタイオスは大足の種族で、足を傘の代わりにして眠るというスキアポデス族(断327)に言及する最初の人物である。これら

その他、エチオピアのマルマケス族、エチオピア人の砂漠の海に浮かぶ大小の島ヒュサエイス（断325・326）が記録されている。

ヘロドトス四巻の「リビア譚」は、彼のエジプトの記述以上にずっとヘカタイオスのものであり、リビアの処理については、現存断篇よりはるかにヘロドトスによったほうがよいとヤコービは指摘している。¹⁸ヘロドトスはまったく彼に言及していないが、語り口の言い回しとその従属関係を示唆している。例えば、「最初に住むリビア人はアデュルマキダイ族で……衣服はちょうど他のリビア人のようなものをまとっている」（四・168）は、「人々は、衣服はちょうどバブラゴネス人のようなものをまとっている」（断287）と一致する。また諸断篇の興味ある特色は、セム系語の代わりにギリシア語地名を用い、それらはカルタゴ支配の沿岸領域に属していることである。例えば、ヘロドトスのシュルテイス湾の代わりにブシュッロス湾を採用し、更にカンテリア（驢馬の町）、エウダイブネ（上等のごちそう島）、ガウロス（舟島）、キュボス（方形台地の町）、メタゴニオン（角を過ぎた所の町）（断332・338a・399・341・343・344）を採録している。ヘロドトスの「リビア譚」（四・168—199）の構成は、（1）東リビアまたは遊牧リビア人（168—190）、（a）個々の部族とその配列を含めて（168—185）、（b）遊牧民の風俗一般（186—190）、（2）西リビアまたは農耕リビア人、ヘラクレスの柱を越えた地域の補遺を含める（191—195）、（3）リビアの住民と自然一般（197—199）となっている。これを断篇と比較してみると、「マジユエス族、リビアの遊牧民……彼らの異称としてはマクシュエス族やマクリュエス族がある」（断334）とされているが、ヘロドトス

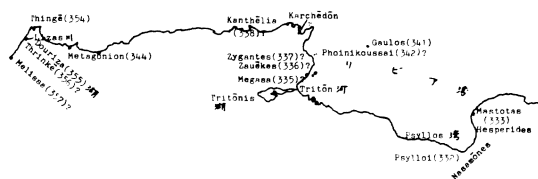


図10 リビア

その町からパン食で農耕民である」と記録されているのだが、残念ながらどの部族に属するかの言及はない。断篇自体からは、リビアでどんな叙述手法を用いたか判明しないが、断335の彼の実際の言葉から、東から西へ進んだと思われる。その他、ヤコービは、ヘロドトスのリビア四地帯分割（二・32・四・181）を、（1）遊牧民の住む沿岸地帯（オイクメネ）、（2）リビアの野獣棲息地帯、（3）砂漠の台地帯、（4）無人の砂漠地帯、と説明し、¹⁹この分割説をヘカタイオスに帰しているが、決定的な確証には不足しているよう。西海岸や海峡近くに関係した地名は、四断篇が言及している。リザス川近くのドゥリザ湖（断355）は、モロッコの西海岸のその河口に

（四・191）は「トリトン河から西、アウセエス族からはもう農耕民のリビア人で、家に住むのを習慣とし、彼らの名称はマクシュエス族である」と記している。もしこのマクシュエス族がマジユエス族だとしたら、遊牧民から農耕民への一大訂正がなされたことになる。トリトン河がリビアの遊牧民と農耕民の境とされ、断335ではメガサの町が「

近いリクスまたはリクス川によって形成されている。ティンギス即ち現在のタンジールについては、リビアの町ティンケ(断 354)の方が、トリンケ(断 356)よりあたっている。メリッサの町(断 357)は、恐らくカルタゴのハンノーによって記録された西海岸の地と同一であろう。

結語

以上急ぎ足で地理篇の断篇を概観したが、その記述の特徴として(1)ある町の記述をその地方の民族と同様にそこの原住民に關連して述べた、(2)熟知の地方は地域に分割して記述、(3)新興のギリシア人やカルタゴ人等よりも古い民族、部族名を用いた、(4)ギリシア本土では町を海との關係で説明していない—地理に熟知していた—ものが多い、(5)神話伝承に關連して名祖や地名起源を説明、(6)綴り字の異形を記し特に古い名称に好意をもつ、(7)民族間の風俗慣習の類似や差違、特に食物、衣服に着目、(8)遠方の地の代わりに近隣の地を想定(合理化)、を指摘できよう。これらに詳細な検討を加える紙幅はないので、一つの事実を付記しておく。個々の資料に対するヘカタイオスの基本的姿勢は、*logos eikos* (合理的な説—断 27)を提示して正しい解釈を求めようとするものであり、その際主な手段は、歴史的なものより地理的なものに基礎を置いていた。因に、ポキスの名祖がポコスで、その町クリサ(クリッサ)の名祖がその息子クリソス(断 114・115 a・b)のように史的關連を抽出したのである。

(早稲田大学院生・西洋史)

(註)

- (1) 断は断篇、証は証言を示し、共に F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker* (FGH), Teil I. A, a, S. 1-47, 317-75, 1926 の番号による。他に K&T. Müller, *Fragmenta Historiorum Graecorum* (FHG), I, pp. 1-31, ix-xxi, W. pp. 623, 627, 1853 も利用できる。なお、ギリシア語の長音は短音で表記した。
- (2) Stephanus Byzantinus. 後六世紀初期の地理学者、断篇のみ現存。
- (3) 主に L. Pearson, *Early Ionian Historians*, 1939, pp. 34-96; F. Jacoby, *Pauly-Wissowa, Realencyclo-pädie* (RE), S. V. "Hekataios von Milet", III 2, 1912, S. 2709-33 織田武雄『古代地理学史の研究』柳原書店、昭和三四年、七五—八〇頁。原随園『ギリシア史研究余滴』同朋舎、一九七六年、五一—六六頁、を参照した。
- (4) (1) は Hdt. I. 166; Thuk. I. 13 (2) は Polyb. III. 22, 5 参照。T. J. Dunbabin, *The Western Greeks*, 1948, pp. 343-44 によれば、アラリア沖の戦勝後カルタゴ人がサルディニア島、エトルリア人がコルシカ島を領有し、ローロが頭すると後者の遺産を継承したと考える。また(2)の条約に関する疑念、海峡閉鎖はこのローマ共和開始の五〇九年ではなく三四八年の条約(R. L. Beaumont, "The Date of the first Treaty between Rome and

- Carthage," JRS 29 (1939), pp. 74-86) は正当なものと見てゐる。
- (5) 詳細は Dunabain, op. Cit. pp. 200-01 参照。
- (6) 断 82・83 間に右廻りにシシリー島の記述が挿入されるとする説がある (Jacob, RE S. 2711)。
- (7) Jacob, RE S. 2715.
- (8) Jacob, RE S. 2714-15 は「シシリー半島に対する旧称フント」(Hdt. VI. 123) をとからこれが示唆されるとしてゐる。
- (9) Pearson, op. cit. p. 59; Jacob, RE S. 2716
- (10) Cf. E. H. Mims, Skythians and Greeks, 1956, pp. 490-92.
- (11) FG rH Kommentar S. 354-55; Jacob, RE S. 2719-22.
- (12) レスボス島のミッティレネの建設だが、指揮官ブリュノンを派遣して占領した。彼とピッタコスとの一騎打の年代は、前六〇七—六〇六年と推定される。
- (13) ペルシア王官造営にイオニア人が参加したことは、現在周知の事実となっている (上岡弘二「クーヘ、ホセイン南ろくの—浮彫人物像」、『オリエント・インド学論集』国書刊行会、一九七八年、一六五頁) のに、この知識の不足は何だろうか？
- (14) 織田武雄前掲書、七九頁はパーレーン島と推定。
- (15) Pearson, op. Cit. p. 79 footnote 4.
- (16) 織田武雄前掲書、七八—九、八一頁のようにオケアノスの湾入したのがカスピ海とする記事は、断篇のどこにもない。
Kynara とは、野性のバラまたはチョウセンアザミの変種であろう。
- (17) エジプト旅行の不足分を大々的な剽窃によって補ったと明決に論じたのは H. Diels, "Herodot und Hekataios," Hermes 22 (1887), S. 411-44 である。またヘカタイオスのエジプト社会紹介の情報を利用したとする批評の典型は W. A. Heidel, "Hecataeus and Egyptian Priests in Herodotus Book II," Memoirs of the American Academy of Arts and Sciences, X VIII, 2 (1935), pp. 53-134
- (18) FG rH, I Kommentar, S. 371 Aum. 329-57.
- (19) FG rH, I Kommentar, S. 371-2 Aum. 329-57; RE S. 2730-31.

Geographical World of Hecataeus

Kazuji Toyoda

When Ionian physical philosophy was born in the 6th century B.C., it was Hecataeus who improved Anaximander's world map with such detail that it was greatly admired. In this philosophical tradition, Hecataeus founded the science of geography and later was called 'the Father of Geography'. His map was published along with a description of the earth in two books, Europe and Asia, the latter including Libya. But we have only fragments of these books, over 300 in all, nearly all of which are very short. Most of them are quoted in a later dictionary of geographical names, 'Ethnika', written by Stephanus Byzantius, in such a formula as 'Sidon, a city of Phoenicians, Hecataeus in his Asia'.

The original has been disparaged as a simple description of coastal area, but in fact it seems to have contained information about the lands and peoples as far as known in that age. The fragments refer to an area from India to the Atlantic Ocean explored by Persian Empire of the Achaemenids and the second colonial movement of Greeks. They also reveal an intelligent curiosity about climate, customs, flora, and fauna, and his work deserves to be called the first general geography.

We can see those fragments compiled by Müller or Jacoby. The author have translated them in Jacoby's book, *Die Fragmente der griechischen Historiker*, I, 1926, and have tried to give a short commentary here.